昔々のそお市

むかしむかし

郷土を知る

第6回

曽於市に遺る歴史的な住居跡

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958

末吉町諏訪方一帯、特に入佐地区・五位塚地区・胡摩地区では縄文時代の遺物があちこちから出土することが古くから知られていました。

入佐住居跡は昭和38年の道路建設により発見されました。道路ぎわの法面（のりめん）から、土器の破片や住居の断面のような層が露出していたのを地域の住民が発見し、同年7月29日から発掘調査が行われました。

調査の結果、住居の中心と考えられる地点に焼土（しょうど）と木炭が検出され、炉を持つ住居跡であることが確認できましたが、残念ながら工事で住居の大部分は壊れてしまっていました。

出土遺物は少量でしたが、他の地域から持ち込まれた土器は含まれておらず、在地の土器ばかりで、しかも縄文時代晩期（ばんき）（約2600年前）の一時期のみ利用された住居であったことが判明しました。

入佐住居跡のように、一度限りまたは極めて短い期間のみの人間の活動が残された遺跡を、単純遺跡と呼びます。また入佐住居跡から出土した土器は、研究の成果により全く新しい形式の土器であることが分かり、縄文時代晩期に使用されていた土器の形式分類学や南九州の考古学において、極めて重要な位置にあることが証明されました。

出土した土器は遺跡名から「入佐式土器」と名付けられました。入佐住居跡は、より明確な遺跡の時期が判明したこと、考古学研究上の基準となる形式の遺物が出土したことにより、標式遺跡（ひょうしきいせき）として大切に保存されています。

昭和 38 年 発掘調査風景（末吉郷土史より）

入佐式土器

（塚ヶ段遺跡出土）

※地層断面に遺物が見つかる場合があります。遺物発見時には教育委員会にご一報を。